

古代の奈良盆地には、巨大な奈良湖が水をたたえていた

奈良盆地の中央は巨大な湖だった！

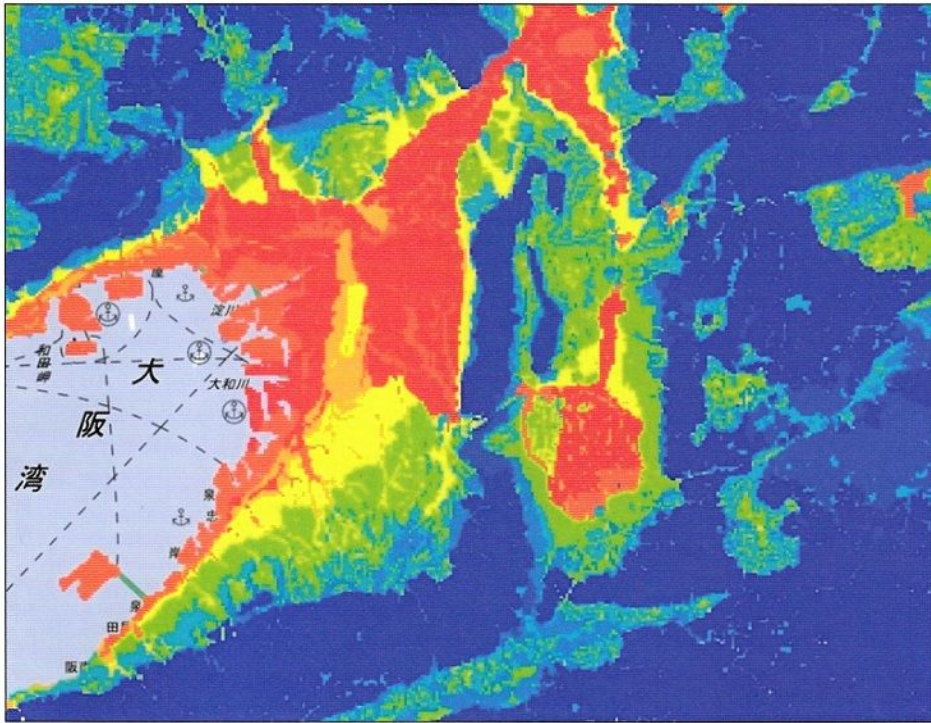
古墳時代から急激に範囲を縮小し、そして消滅した奈良湖。

現在は消えてしまった奈良湖 奈良の繁栄は、奈良湖が支えていた

奈良盆地に広がる広大な軟弱地盤

25 ページの図 (引用者: 下に掲載) は、表層地盤の揺れやすさを示した図である。この図について簡単に説明すると、青い色の濃い地域は地震による揺れが少ない固い地盤で、赤い色が濃いほど、揺れやすい軟弱な地盤ということになる。

近畿地区の表層地盤増幅率(独立行政法人防災科学技術研究所が公表している「地震ハザードステーションJ-SHIS」確率論的地震動予測地図・地盤増幅率(Vs≧400m/Sから地表) ©2011 独立行政法人防災科学技術研究所) 表層地盤における地震波の増幅率の分布を示した地図。軟弱地盤が視覚的に理解できる。



旧河川や海岸など、堆積物の多い土地や埋め立て地は軟弱な地盤となり、地震による揺れも大きくなる。この図の赤い地域は、そういった柔らかい地盤ということなのだが、古代に海であった場所や、湖や沼であった地域が、この図でははっきりと表現されているのが理解できるだろう。(22 ページ・奈良湖推定図を参照 <引用者: ↓この地図のこと>)

<http://pdffile.cocolog-nifty.com/blog/files/29.pdf> (クリックしてください)

奈良盆地では、22 ページの地形から推測した奈良湖にはほぼ一致する形で、軟弱地盤が形成されているが、これは、この範囲が古代には湖底であり、泥や砂などの堆積物によって形成されていることを示している。

この赤い色の軟弱地盤の分布は、まさに奈良湖そのものの存在を示しているものであり、近似的にその範囲を我々に教えてくれている。

また、縄文海進の時代に海となっていた河内湾、江戸時代までは広大な湖で巨椋池だった土地が、どこも軟弱地盤として視覚的に確認できるのが面白い。

奈良の古街道 山の辺の道

古代の奈良には、南北方向に4つの古街道が存在し、今もそれらの痕跡は残り、かなりの部分が、現在も道路として用いられている。

その中で最も古いとされる山の辺の路は、奈良盆地の東縁部を断崖に沿う形で走っている。これは、古代に存在したと考えられる奈良湖の岸部近くにあったためであると推測する研究者がいるが、その可能性は高い。道が直線的でないのも、



奈良盆地の古代道路 (奈良県立万葉文化館 学芸員Blog「まんようやしき」掲載の図版をもとに作成) 奈良盆地には、南北方向に走る道と、東西方向に走る道がつけられ、ネットワークとして機能していた。

そのためであろう。

なお、奈良教育大学地学教室の梅田甲子郎の研究によると、山の辺の路の東側は領家式岩類と呼ばれる堅い岩盤で、その西側は礫れき、砂、粘土による「ある広さをもった湖沼を含むやや大規模な水域に堆積した比較的厚い地層」（山の辺の路付近の地質と地形）と表現されている。これは、まさに奈良湖の存在を示す言葉である。

地質学的アプローチのみではなく、考古学的な史料からも、奈良湖の存在は確認することができる。

左の図（引用者：右に掲載）は、大和地方の豪族の分布図である。

一目してわかるように、奈良・飛鳥時代の豪族たちは、奈良盆地の中心を避けて、勢力範囲としている。これは、彼らが活躍した時代、奈良盆地の中心が、活用できる土地ではなかったからと解釈できる。蘇我氏が比較的中央よりに勢力を広げているのは、彼らが後進の勢力だったからとすれば納得できる。同時に、蘇我氏は後退する奈良湖の湖岸を追いかけるように開発を続けていたとすれば、蘇我氏の勢力拡大の理由も理解できるのではないだろうか。

河内湖周辺を開発することができた物部氏と、奈良湖を開発できた蘇我氏が勢力を二分し、のちに争うことになるのもうなずける話である。

この時代の豪族たちが奈良湖の縁辺で活動していたということからも、古墳時代には、まだ奈良湖は湖沼、または沼沢地であったということの傍証となる。



奈良盆地周辺における豪族勢力図（関裕二著『物部氏の正体』をもとに作成）盆地中央部が空白域になっていることが確認できる。

禍転じて福となす 奈良人たちの逆転の発想と知恵

土砂の流人を利用して農地を拡大！

四周を山に囲まれた奈良盆地には、周囲から土砂が絶えず流れ込んでいた。

山地より押し出される土砂は 農地拡大のチャンスとなった

……注目すべきは、山地に大雨が降ったあと、雨水が谷間に集まり、土砂を押し流すという現象そのものである。……奈良盆地に奈良湖があった時代にも、当然ながら同様の状況はあった。そして、四周を山に囲まれている盆地においては、それは日常的な事象であったはずである。

禍転じて福 谷間に流れ下る土砂は宝物

この、谷間を流れ下った土砂であるが、石や木を取りのぞいて平坦にすれば、これはそのまま耕地であり、畔を作って水を張れば水田となる。これを繰り返すだけで、農地は拡がり、奈良盆地は穀倉へと変わっていく。

奈良盆地に流れる河川は、どれもが直線的で、他の地域の河川とは異なった様相を呈している。これは、奈良盆地の河川が、人為的な改変を受けているためと考えられる。前述のように、四周の山間から流出する土砂は、古代においては農地を広げる宝であった。

さらに都合の良いことに、奈良盆地の中央には奈良湖が広がり、なおかつ、奈良湖は時とともに湖面の水位を下げ、その姿を消すまで後退し続ける存在であった。

沼沢地・湿地帯の一部を溜池として残しつつ、湖水の後退に合わせて開墾を続ければ、そこはすべて農地へと変貌するのだから、これほど楽なことはない。四周の山々からは土砂の供給を受け、いく筋もの川が平地を流れていく。開発をし続けた彼らは、河川も自分たちの都合のいい形に変え、その結果、奈良盆地の河川は人工的で直線の多い形状となった。

奈良盆地では、こうして富が拡大を続け、古墳時代、飛鳥時代と独特の文化を築いていくことになる。

内陸にありながら、奈良盆地は外洋とつながっていた

河港により大陸に開かれていた奈良盆地

外交のため、奈良盆地から、繰り返し大陸に向かって使者が発せられた。

大陸との交流で奈良盆地は先進地域となった

発達していた古代の水上交通

青森県にある縄文時代の遺跡・三内丸山遺跡は、今から約 5500 年前～4500 年前の期間、多数の縄文の人々がここに定住していたことを示す、たいへん貴重な集落跡である。

集落の巨大さ、使用期間の長さ、発掘された遺物の多さなど、どれもが研究者を驚かすものであったが、特筆すべきは、他の地域から運ばれたヒスイや黒曜石が発見されたことであろう。

これは、数百キロも離れた地域との交易を示すもので、それまでの縄文観を、大いに変化させるものであった。

少なくとも、日本の一部では、沿岸航海による交易の萌芽が存在したことは事実と見てよいだろう。なお、ここで用いられた舟は、刳船くりぶね（丸木舟）であったと考えられている。

卑弥呼の時代、邪馬台国は魏に、朝貢の使者を送っている。邪馬台国がどこにあったかは議論の分かれるところであるが、近畿説が正しいとすれば、魏に朝貢した使者は、奈良盆地を発して中国人陸に渡ったことになる。

この時の船は、さすがに刳船ではなかっただろう。おそらくは、松阪市宝塚一号墳から発掘された船形埴輪のような、準構造船（船べりに舷側板を継ぎ足し、船首に波除板を取り付けるなど、刳船に部品を付け加えた、刳船よりも渡航能力の高い船）であった。

しかし、奈良盆地には、外洋船が直接入ることはできない。大陸に向かう使者たちは、小型の舟で大和川を下り、難波津（大阪）あたりで大型の準構造船に乗り換えたと思われる。

なお、奈良盆地にはいくつかの河港があり、代表的なものでは、三輪山の近くの海柘榴市つばいちが知られている。これら奈良の河港は、大和川で瀬戸内とつながるのだが、大和川が大阪平野に抜けようとする狭窄部、亀の瀬には、江戸時代まで銚子口という滝があった。そのため、ここで一度荷をおろして陸路を進み、下流で舟に荷を積み替えるという作業が必要となる。

あまり大きくない舟の場合、古代では、陸上を運ぶケースも少なくなかった。『古代史の謎は「海路」で解ける』の中で長野正孝氏は、2世紀ごろには丹後半島の内陸部に、舟を曳いて陸上を移動するルートがあった可能性を説いている。同様に、亀の瀬においても舟ごと陸路を移動した可能性はある。

ちなみに、『日本書紀』では、隋に赴いた小野妹子は、隋の使者とともに帰国し、難波津を経由して、海柘榴市に到着したとある。

奈良は、内陸にありながらも大和川の水運により、世界とつながった国際都市であった。

中国の史書では、413年から478年の間に、5人の王が少なくとも9回、朝貢の使者を送っている。この5王がだれかについては、「讚」が履中天皇、「珍」が反正天皇、「済」が允恭天皇、「興」が安康天皇、「武」が雄略天皇との説があるが、確定には至っていない。

これら5人の天皇は、それぞれ奈良盆地に宮を営んでいた（雄略天皇の泊瀬はつせ朝倉官は、河内説もある）。奈良の地から大陸に何度も使者が出ていたことに驚かされるが、それだけ、この地域が豊かで強大な勢力を誇っていたことの証明でもあろう。

<この資料は、「**生駒の神話**」（下記 URL をクリック）に掲載されているものです。>

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/>